

広島県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
長期の高水温 貧酸素、高塩分による生理障害	原因究明	【県の取組】 ☑原因分析 ①現地調査による、海況環境の差異によるへい死状況の把握 ②室内実験による海洋環境条件下でのへい死リスクの検証	①へい死状況の異なる 2 か所 ②広島県水産海洋技術センター	大きなへい死の報告なし	昨年と同程度の高水温 昨年よりも梅雨時期の降雨が多い。	
	①へい死発生時の早期対応 ②高水温対策 ③適正な養殖密度 ④モニタリング強化 ⑤安定的な種苗採取 ⑥環境に適した種苗の導入 ⑦貧酸素対策 ⑧養殖方法の検討 漁場環境の改善	【県市町村、漁業者の取組】 ☑養殖方法の転換 ①漁場環境のリアルタイム観測 ②カキの水深操作など短期的へい死対策の実証 ③適正養殖密度による養殖管理などの安定生産へ向けた中長期的な対策の検討 ④漁場環境モニタリングの項目（塩分濃度及び溶存酸素）の追加 ⑤AIを活用したカキ幼生調査の支援 ⑥環境の変化に強い種苗を育成するための管理技術の実証 ⑦海水循環ポンプを用いた溶存酸素濃度の向上 ⑧干出による種苗の強化 ☑漁場環境の改善 海底耕うん・牡蠣殻等を有効活用した漁場の底質改善	①15地点 ② 2 漁協 ③9漁協 ④ 8 地点 ⑤ 6 漁協 ⑥ 2 地点 ⑦ 1 漁協 ⑧ 5 漁協 10漁協 ・約3km ² にカキ殻などの底質改善剤を散布や、海底耕うんを実施			

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

岡山県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温・高塩分	へい死の原因究明とへい死発生時の早期対応	【県の取組】 ☑カキのモニタリング調査 ①成育状況調査 ②へい死状況調査 ③カキの漁場環境調査	複数の漁協	①成長は例年と同程度であるが、沖合の漁場で成長が悪い ②8月上旬で6~25%	水温：昨年よりも0.7℃程度高い クロロフィルa：6月以降、昨年より高い値で推移 ・7月にまとまった降雨	

		☑移動系列の違いによるへい死率調査	2 か所 (塩分の低い漁場と高い漁場)			

		☑データベースの作成と漁期予測（情報提供体制の構築）	岡山県下全域	データ収集中		
	高水温・高塩分対策等	【漁業者の取組】 ☑養殖手法に係る取組 ①比較的へい死が少なかった低塩分の漁場の活用	① 1 漁協	へい死はほとんど確認されておらず育ちは良好。身入りは平年並み。	①塩分は平年より高め、クロロフィルaは平年より低め	本垂下後に魚類による食害が発生している場所があるが、今年は少なめ
		②漁期中に行う筏の移動時期や方法の見直し	② 1 漁協		②塩分が平年より高め	
		③三倍体種苗の養殖数量の増加	③ 1 漁協		③クロロフィルaが平年より低め	
		④抑制方法の見直し	④ 1 漁協		④水温、塩分が平年より高め	

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

兵庫県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 エサ不足	へい死の原因究明	【県の取組】 ☑陸上水槽飼育実験により、高水温下における餌料条件を比較することで、へい死、産卵状況、成長差等を調査	場所： 兵庫県立農林水産総合センター 水産技術センター 規模： 200L水槽× 6 基程度	今のところ順調。 顕著なへい死は見られない。	水温は、全層（表層、中層、底層） 平年より高め。	7～10月：飼育実験 11月～：結果とりまとめ
	高水温対策	【県の取組】 ☑高水温環境に適応するためのマガキ養殖方法の確立を目指すため、従来とは異なる養殖方法（夏期の高水温を回避する養殖）に取り組む	場所： 一部の漁協 規模： 吊り線数十本程度		塩分は、全層（表層、中層、底層） 平年並み。 クロロフィルaは、表層で平年並み、中層は平年より低め、底層は平年より高め。	7～9月：現地実証試験 10月～：結果とりまとめ
		【漁業者の取組】 ☑種苗導入時期の変更	場所：各生産者 規模：不明		溶存酸素は、表層で平年並み、中底層で平年より高め。	昨年よりも7月の降水量が多い。 毎年、種苗の垂下直後から7月下旬ごろまでクロダイ等の魚類による食害が発生している。

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

愛媛県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 貧酸素	高水温対策 エサ不足対策	【漁業者の取組】 ☑養殖手法に係る取組 ①筏に遮光シートを設置 ②筏を潮流の早い海域に移動	場所：A市 規模： ①養殖用筏 3 ～ 5 台 ②養殖用筏 2 台	【二倍体】 育ちは平年並み		近年クロダイ等の魚類による食害が発生（垂下する種苗を束にして、内側の種苗を保護する等の対策を実施）
	環境に適した種苗の導入	☑種苗に係る取組 ① 3 倍体マガキの養殖 ②複数の産地から種苗を導入することによるへい死リスクの分散	場所：B町 規模： ①年内に9名が合計 33万個を導入予定 ※バスケット養殖 ②種苗の産地別に 各 2 籠程度	【三倍体】 ・4月からのモニタリング結果で生残率 5割 ・6月の長雨による水潮でへい死が増加した。 ・バスケット、カキ本体にもフジツボが大量に付着しており、6月から7月にかけての成長が停滞した。	クロロフィルa濃度が前年より低い	・6月の長雨で河川水が大量に流れ出た影響と考えられるへい死が発生。 ・2年目の三倍体カキがクロダイによる食害を受けた ・フジツボが例年より多い
香川県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 餌不足 貧酸素	モニタリング強化	【市、漁業者の取組】 ☑水産センサー設置による漁場環境モニタリング	1 漁協	【二倍体】 ほとんどへい死なし。育ちは良好。		クロダイ等の魚類による食害が発生（垂下連の間隔を狭める。建網を養殖施設周辺に設置する、食害を見越して種がたくさん付いているコレクターを購入する等の取組を行っている）
	環境に適した種苗の導入	【漁業者の取組】 ☑種苗に係る取組 ① 3 倍体マガキの養殖 ②R 7 漁期の生残率が高い又は高水温耐性が高いとされる産地の種苗を導入	3 漁協	【二倍体】 ほとんどへい死なし。育ちは良好 【三倍体】 一部地域では、7月下旬から8月上旬の約1週間で一部ロットの6割がへい死		今年はムラサキイガイが多い

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

徳島県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 貧酸素 エサ不足	高水温対策	【漁業者の取組】 ☑養殖手法に係る取組 ①深吊り ②養殖エリアの分散 ③酵素の投与（代謝改善を目的として、週に1日、酵素を含んだ海水で養殖）	昨年度養殖と同区画 ③R8年養殖開始分 試験区：500種苗 対照区：500種苗 R7年養殖開始分 試験区：500種苗 対照区：500種苗	③へい死は確認されていない	水温： 平年より高い DO： 平年より低い	今年はフジツボが多い 赤潮は発生無し ①R8.5月および10月に実施
	へい死リスク分散	☑水揚げ時期の調整 夏場へい死前の冷凍品の開発	場所：A町 規模：5~10万貝	サイズ的には小さいが、身入りは平年よりも良い 【三倍体】 5割程度のへい死（6月の降雨の影響か）	水温： 平年より高い DO： 平年より低い	
	高水温対策	☑種苗に係る取組 3倍体への切り替え	既存水域		水温： 平年より高い DO： 平年より低い	R8.9月 種付け
	貧酸素対策	☑漁場環境の改善 底質改良材の散布による貧酸素状態の改善	B漁協			R8.8月：底質改良材散布 R8.8月、11月およびR9.2月：漁場環境調査
大阪府						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 赤潮（ヘテロカプサの増加）	へい死発生時のリスク軽減	【県の取組】 ①漁業共済への加入促進 ②養殖再開に対する補助事業の実施 ○カキ養殖再開支援事業 補助率：定額（10/10） 1事業者あたり上限50万円	場所：大阪府下全域 ②9 漁協 ※その他漁協も順次活用予定	へい死の報告は無し	8月第3週の水温は平年と比べて1℃くらい高い	

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

山口県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温 エサ不足 降水量の減少	適正な養殖密度	【漁業者の取組】 ☑飼育密度の管理 ①バスケット式養殖において、カゴの体積に対して、1/3～2/3の収容になるよう徹底を図る。 ②新たな養殖場を検討。	場所：県内2漁協	目立ったへい死の報告なし		
	付着物対策	☑付着物の除去の徹底	場所：県内2漁協			
	高水温・少雨対策	☑越夏試験のため、数カゴ分を別海域（湾）にて養殖中	場所：県内1漁協			

高知県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
不明	へい死発生時の早期対応		場所： 貝類養殖区画に近い 魚類養殖区画に1基設置予定 ※隣接する漁協にも1基設置予定	目立ったへい死は確認されていない	水温： 表層は平年並み、水深5m、10mは前年より高い 塩分： 前年より高い	

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

三重県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
	環境に適した種苗の導入	【県の取り組み】 ※令和7年度から継続 ①水産研究所でのへい死対策試験（3倍体種苗の有効性の検証など） ②栽培漁業センターでの三倍体カルチ種苗生産実証試験	①県内生産者を集めた意見交換会を開催し、令和7年度の試験結果を普及した ②令和7年度に実証試験により生産した三倍体カキカルチ種苗200連を試験的に配布した	特に情報なし	昨年と同程度の高水温・塩分 昨年に引き続き天然採苗が不調（鳥羽海域） 7月中旬と8月上旬に、海水の混合による表層水温の低下（約3℃程度）を確認	クロダイやフグなどの魚類による違いの食害が発生している（垂下する種苗を束にして、内側の種苗を保護する等の対策を行っている）

福岡県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
	食害対策	☑養殖手法に係る取組 食害の可能性がある地区には束ね垂下を実施するよう指導	複数漁協	【A海区】二倍体・7月までに顕著なへい死は見られない。 ・例年に比べて小型個体が多く、むき身重量も少ない。 【B海区】二倍体・7月までに顕著なへい死は見られない。	【A海区】 水温：表層はかなり高め。低層は平年並み ・例年よりも海水の透明度が高い。 【B海区】 水温：かなり高め。塩分もやや高め。	
	環境に適した種苗の導入	☑種苗に係る取組 海域に適した種苗産地の選定	複数漁協の養殖筏			

各府県のR 8 年度のへい死軽減等に向けた取り組み計画の概要（R8年度8月更新）

宮城県						
へい死推定要因	主な目的	取り組み内容	場所・規模	カキの状態/へい死状況(8月時点)	養殖場周辺の環境	備考
高水温等 （※令和 5 年度から高水温が継続	へい死原因究明	【県の取り組み】 ☑県水産技術総合センターによるへい死調査※令和 5 年度から継続	県中央部のカキ漁場でへい死調査（カキサンプリング、漁場環境モニタリング） ※令和 5 ～ 7 年度までは県南部で調査	大きなへい死の報告なし	昨年より水温が低く推移 （8月上旬は高水温期（令和5～7年度）と比べ、1.4～4.0℃低い	食害については大きな問題になっていない
	環境に適した種苗の導入	☑県水産技術総合センターによる 3 倍体カキの種苗生産技術開発や有効性の検証など※令和 4 年度から継続	県水産技術総合センターで屋内試験、漁場で試験養殖			
	高水温対策	☑高水温等の環境変動に対応するための支援（県単独事業）（生産工程見直し、深下げ、3倍体カキの導入等に係る資材経費を支援し、漁業者による取り組みを後押し）※令和 6 年度から継続	県下全域を対象			